

特集

『創業者に聞く』

谷口奈保子さんロングインタビュー

第1回

今回からぱれっとの創業者である谷口奈保子さんにお話をお伺いし、これまでのぱれっとの成り立ちやこれからのぱれっとについて考えていきます。今月号は創業の想いとして、ぱれっとをはじめたきっかけや理念についてお届けします。

1983年の創業から今年で43年が経ち、時代の変化とともに新しいスタッフも増え、ぱれっと創業者の谷口さんと共に働いた経験のない職員がほとんどを占めています。そこで、改めて、創業当時の想いをお聞きするとともに、現在直面している課題や今後何が必要とされているのかを考えていきます。

主にたまり場ぱれっと職員の武井とおかし屋ぱれっと職員山元の2名で谷口さんから直接お話をお伺いして、創業者の想いを次の世代へと受け継ぎ、未来に残していきます。今月号の特集では、創業の想いについてお届けし、その後各セクション立ち上げの経緯や現在の想いなどにつなげていきます。

●はじめに、ぱれっとを立ち上げた動機を教えてくださいませんか？

長女が3歳の時に小児がんを患い、余命1年の闘病生活を余儀なくされ、病院で過ごす時間が長くありました。その時に経験した不安や辛い思いから、同じ境遇にいる方々を支えたいという考えになり、34歳の時に病院ボランティアを始めて9年間続けました。親と子どもと一緒に、家族も含めたケアが必要だと感じ、当時の関係者に訴えましたが、その頃の医療現場は、命が優先で親のケアまで考える余裕はないと消極的な姿勢でした。幾度となく困難に直面する中で、自分が経験したからとは言え、中途半端な知識だけではダメだと感じ、家族

と話し合っ、38歳の時に母校である大学の福祉学部に入り直し学ぶことにしました。この頃は2人の子育ての真っ最中。病院ボランティアをしているだけでも大変だったのに、その上大学に入るということには家族からも反対がありましたが、そんなに覚悟があるならと最後は背中を押してくれました。

大学の授業では教育実習を通して養護学校高等部(現在の特別支援学校)に行く機会がありました。私が見てきた、病院の閉鎖的な空間にいる子どもたちとは違い、障がいのある生徒が楽しく過ごす様子に大きな衝撃を受け、もっと知りたいと思うようになりました。実習終了後は、病院でのボランティアもしつつ、養護学校でのボランティアも始め、高校1年生の生徒が卒業を迎えるまで担当を受け持ちました。

●やめたいと思ったことはありませんでしたか？

その時の学校ボランティアでは、知的障がい者の気持ちが分からずとても苦しみました。担任の先生が職員会議で不在の時にある生徒が私のやっている作業の邪魔をしてきました。いくら注意しても止まらず、3回目の時にカッとなり、つい手が出してしまったのです。この時の自分の行動にとってもショックを受けてもうだめかと思いました。自分の子どもではなく、障がいも見た目だけではよく分からず、どうしたらいい

か本当に困ったことを覚えています。ただただ、この子たちはこれからどうやって社会で生きていくのだろう・・・と、居ても立っても居られない気持ちになりました。

その後病院ボランティアから方向転換をして、障がい者と関わるが増えて来た頃、知的障がい者は高校卒業後、大人になってからの選択肢が極端に少ないことを知りました。そこで、地域で交流の場をつくるボランティアに参加を始めました。現在も続いている、渋谷区の「えびす青年教室」です。

えびす青年教室は月1回の活動で学級生と呼ばれる障がい者が、ボランティアのサポートを受けながら、料理や運動などに取り組んでいます。活動を続ける中で、そこに参加していた当事者の青年たちが、月に一度の活動だけではなくもっと恒常的に集まりたいという思いがあることを知り、当時参加していたボランティアを中心に気軽に集まれる場所を作ろうと立ち上がりました。これがぱれっとの始まりです。活動内容は決めずに、ただ部屋を開放して利用者の希望を聞いてやりたいことをやるという自由な場所として始めました。ボランティアにお膳立てされるのではなく、自らが決める主体的な場所であることを大事にしてきました。

当時障がいのある人たちは親や家族に守られている立場で、その存在は地域の中で見えにくく、外で見かけることがほとんどありませんでした。だからこそ、障がい者と一緒に作っていき、地域社会からも見えるようにしていくことが重要だと考えていました。ですが、当事者の親は保守的で男女関係ひとつとっても不安に思う気持ちが強く、活動に対して反対する声が多くありました。スカートを履いてきた女性の利用者に対して、スウェットを履かせるべきだと言ってきた親もいました。実際、中には

スカートの中を見ようとしたり、反対にわざと短くして感わそうとする人もいました。また、活動するための部屋がなかなか借りられず、障がい者が出入りすることを伝えると断られるケースが続きました。そんな時に、活動資金を貯めるために行っていた、中学生の英語教室の親御さんがご自宅の1階を貸してもいいと申し出てくれたのです。ようやく場所を確保することができ、6畳2間の1室で始めることができました。1983年の7月のことです。

●ぱれっとの名前の由来や理念に込められた想いを教えてください。

「ぱれっと」は、絵画のパレットのように、色々な色が混ざり合い新しい色を作ることに置き換えて、色々な人が集まり、違いを受け入れて新しいものを生み出す可能性を見出していく想いが込められています。ひらがなののは、絵画教室と間違えないように、そして柔らかさを大事にしたいという思いからです。



団体のロゴ。「ぱれっと」の文字は谷口さんの手書き。

まずは何事もトライしてみないと分かりません。ネガティブにならず、ポジティブな気持ちで始めたらいいという考えの元、ぱれっとを作ってきました。一人ではできないことも、皆が集まって作っていくのがぱれっとです。だからこそ、新しく仲間になる人に対してぱれっとの理念をちゃんと説明して、実際に活動を見てもらってから信頼関係を築いていくことが大事です。

とにかく、私は人が好きで話をするのが好きです。だからぱれっとを立ち上げ、これまで続けて来られたのです。当時ぱれ

っと作りに関わったボランティアが結婚の報告や子どもが生まれたことを伝えに来てくれたり、活動に戻ってきてくれたりすることが多くて、嬉しく思っています。



当時のたまり場ぱれっとの様子

●谷口さんのバイタリティに影響を与えたものはなんですか？

根底となる考え方として、実の母親の「女性も自立するべきだ」という考えが影響しています。私は演劇をやりたくて日本大学芸術学部を内緒で受け、受かっていましたが、母からは演劇で自立していかれるわけがないと反対されてしまいました。その後他の大学の英文科に入学することになったものの、夢を諦めきれず、英語劇のサークルを立ち上げました。「英語を活かせるのなら」と母親も了承してくれました。私は役者として舞台上で演じることも、演出家として、音響や照明、小道具などすべての役割に関わる人たちとともに作品を作り上げることに魅力を感じていました。

卒業後は、日本オリベッティというタイプライターの製造・販売会社として創業した会社に入社し営業マンになりました。演劇を目指しただけにセールスは得意で、1か月に平均1台しか売れない高級なものを11台も売って表彰されたこともあります。面接時にも、自分は内勤には向いていない、外勤がやりたいと伝えていました。当時は女性が外回りをするのが珍しかった

ですが自分にあっている仕事でした。その後結婚しても働くつもりでいましたが、夫が自営業だったため、家のことをしてほしいと言われて退職することになりました。

長女が小児がんの闘病中、一時退院（寛解期）がありました。その時は何がしたいのか本人の要望になるべく寄り添い、幼稚園に行きたいと言った時も兄と同じところに通いました。手術を受け、人工肛門をつけていたので、他の親だったらきっとそんなことはさせないと思いますが、私は、特別扱いをせず、普通の生活ができる環境を心がけていました。

ぱれっとを立ち上げた後も、視野が狭くなってしまいうからと、海外の研修に出かけています。2002年にはCGP（国際交流基金日米センター）のインターンとしてニューヨークに1年間滞在しました。この時は非営利組織の中心になる人を育てるという研修だったため、30代、40代が多く当時58歳だった私は一番年上だったと思います。実は70歳には引退することを決めていて、その頃から徐々に講演会や見学の依頼などは、相馬さん（現在の理事長）や南山さん（事務局長）に委ねていました。

●おかし屋ぱれっとへと続く

今回の特集では、谷口さんにぱれっと創業の思いをお聞きしました。次回は、ぱれっとの大きな柱である『おかし屋ぱれっと』がどのように生まれたのかをお届けします。現在では食品を扱う福祉作業所は増えましたが、当時は珍しく先進的な取り組みだったクッキーづくりをなぜ始めたのかを深掘りしていきます。

（おかし屋ぱれっと武井・山元）